例えばこんな恋の話

りいち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
例えばこんな恋の話

【Ｎコード】
Ｎ２５７９Ｊ

【作者名】
りいち

【あらすじ】
浮気男の彼女も楽じゃない。それでもさよならを言えないのは、君のせいだと思う。

亮介が、また浮気をした。

「もう二度と電話かけてくんなよ」

怒りに任せて電話口に向かって言えば、相手の女は甲高い声で　はぁ？　　と言った。私は次の言葉も待たずに電話を切る。素早く携帯を閉じて、あぐらをかいて座っている亮介にぶん投げた。それは丁度彼の股間辺りに当たり、亮介が　いてぇと情けない声を上げる。ざまーみろ。馬っ鹿みたい。

これで満足かよ、とでも言いたげに亮介が苦笑いするから、私は再び怒りを露わにした。何様のつもりだ、バーロー！

私は吸いかけのまだ長い煙草を灰皿に押し付けてから亮介に向き直った。

「てめぇいい加減にしろよ！　これで何回目だと思ってんだよ！この下半身無節操男！」

「あぁ！？　んだとコラ」

私の口の悪さは生まれつきだ。私のこの怒鳴り声に、亮介は心底鬱陶しそうな顔をすると、事もあろうかこの男は　うるせぇなと呟いた。自分の立場分かってんのか。

彼氏の携帯から彼氏の浮気相手に電話をかけるなんて滅多にあることじゃない。けれど私はこれをもう、亮介と付き合ってきた一年間半で４回も経験している。何てことだ。

つまりこの男は馬鹿なのだ。浮気はどうせバレるんだと言うことがどうして分からないんだろう。今回の場合、何気なく見た彼の携帯のデータフォルダに知らない女との2ショット写真が入っていたのが事の発端である。胸がでかくていかにも男モテ系を狙った服を着た女がカメラのレンズを誘惑するかのように見つめていた。上目遣いの上手い女は性格悪いんだ。そんな女にひっかかんないでよ。つまんない男。死んじゃえ。

私はその場にうずくまった。亮介と一年間暮らしてきた、7畳一間のこの狭いアパートの一室で、涙も出ないのに膝を三角にうずくまって顔を伏せた。

そしたら亮介が濃い溜め息を吐くのが聞こえたから、私の心がまたちくりと針で刺されたように痛んだ。

「もうしないって言ったよね」

「浮気じゃねぇよ」

「あーもう、嫌」

「だから普通に女友達だって」

「ほんと無理。馬鹿。絶対嘘」

「じゃあ別れるか」

は？　それって本来、私が言う台詞じゃないの？　何であんたが愛想尽かしてんだよ。愛想尽かしてんのはこっちの方なんだよ！

「もー。知らないよ。あんたなんてもういらない」

弾みで言った言葉じゃない。心の底からそう思った。故に亮介が黙って部屋を出て行き、玄関のドアをわざと大きな音を立てて閉めたことに対して、当然だと思う。

「っあー！　ボケ！」

私以外誰もいなくなった部屋で腹の底から叫ぶけど、虚しく響くばかりで亮介には届かない。何も持たずに出て行ったけど、彼はこんな時間からどこへ行こうというのだろう。亮介の買ってきた趣味の悪いデジタル時計を見れば、もう終電の時間はとっくに過ぎている。

あぁそうか、浮気相手の女のところへでも行くのか。

そう思った瞬間、涙が溢れて止まらなくなった。亮介には他に女がいるけど、私には誰もいない。だって私が好きなのは亮介だけなんだもん。

この悲しい気持ちをどうしても、私はちゃんとした言葉にして言うことができないんだ。

亮介はどうして出て行ったりなんかするんだろう。何で私を悲しませるようなこと、するんだろう。

そう思いながらも結局一年半ずるずると別れられなかった自分に嫌気がさす。だって、引っ越しとか面倒だし、お金かかるし、荷造りなんかしたら悲しくなっちゃうし。

でも私分かってるんだ、もう浮気しない、と毎回言ってきた亮介の言葉を何よりも信じてきたからだって。

ずっと同じ体勢でうずくまってたから、お尻が痛くなってきた。あぁもう、最悪。日付はとっくに変わり、亮介が出て行ってから３０分が経とうとしている。

そして私は、亮介に向かって　いらない　と言ったことを少しだけ後悔した。

その時、玄関のドアが音もなく開いた気配を感じ取る。亮介が、帰

ってきた。
これ見よがしに私は背中を丸くしてうずくまった。本当は座りっ放しでお尻が痛かったけど、我慢。
ゆっくりと近付いてくる足音を聞きながら目を瞑る。振り向いたら負けだ、そう思った時、後ろから亮介の大きな手が私の身体を抱き締めるから渇いていた涙がまた溢れそうになった。

「ごめん」
「……」
「いらないとか言うなよ」

振り向くと、亮介の膝元に大量のお菓子とアイスクリーム。私が甘いものが好きだから、買ってきてくれたのだ。

「こんなもんで釣ろうと思ってんの」
「これはオマケ」

そう言って笑った亮介の言葉の意味が痛いほどわかる。本当は、亮介が帰ってきてくれただけで、それだけで良かった。

「ごめん。もう裏切らないから」
「嘘だ」
「絶対裏切らない」

亮介はそう言って私を抱き締める腕に力をこめた。
亮介はきっと、また私を裏切る。しばらく経つと今日のことを忘れてまた違う女をつまみ食いするんだ。
それでも分かってて頷いた。

「うん。絶対、だよ」

私、馬鹿だ。
でも、馬鹿で良かった。
こうして亮介が抱き締めてくれるから。

（でもあんたと結婚はできないね）
（は？　なんで！）
（自分の胸に手ぇ当てて聞いてみろ！）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2579j/

例えばこんな恋の話

2010年10月28日07時34分発行